

2025 年度開催 第 13 回大谷大学文藝コンテスト

小説部門 総評

審査委員長 安藤 香苗

第 13 回「大谷大学文藝コンテスト」「小説部門」においては、今回は 85 作品が寄せられ、青年期に揺らぐ微細な感情を丁寧にすくい上げた作品から、確かな構想力に裏打ちされた物語性の強い作品、著名な物語を翻案し新たな作品を作り上げたものまで、幅広い作風のもものが集まった。最終審査に残った作品はいずれも高い意欲を感じさせるものであり、全体として水準の高い選考となったと言える。

審査の段階ごとにどのような観点でふるいに掛けられたのか、今回を例に大まかに示すと次のようになるだろう。まず一次審査では、小説としての体裁が整っているか、日本語表現に大きな破綻がないかといった基礎的な点が重視された。続く二次審査では、作品世界や主題の独自性、構成の必然性が問われると同時に、作者の関心が自己の内面や技巧の誇示に偏りすぎ、読者との共有可能性を欠いていないかという点が判断のポイントとなった。また、着想やモチーフに魅力があっても、物語全体としての構成が十分に練られず、結末に至る必然性が弱い作品については評価が伸び悩んだ。いわゆる自己満足にとどまる印象を与える作品は、見るべき表現があったとしても、この段階ではマイナス評価とならざるを得なかった。

最終審査に残った作品は、はじめに述べたようにバラエティに富んだ高水準の作品群であり、審査会においても評価の観点や重視する点をめぐって意見が分かれた。人物造形の確かさや主題の射程、構成の完成度など多様な意見が交わされたが、最終的には、作品全体としての必然性と完成度、そして読者に強い印象を残す力を備えているかどうかを選考の決め手となった。

作者自身の関心を起点としながらも、それを他者と分かち合いうる物語へと鍛え上げていく姿勢を、今後の創作において期待したい。